

書評 『核武装論』（西部邁）

1. はじめに

日本が今から核武装するということは、「NPT くそくらえ」を意味しますから、**輸出管理屋にとっては根源的な挑戦状**といえます。

いわゆる武断主義の人が主張するのは、そのキャラクターからして当然という気がしますが、学問のある人の議論はどんなものなのか。そこで論者の中でも博学そうな西部先生の御本を手に取りました。実は対談『保守問答』を読んだときには、中身がさっぱり分からなくて往生したのですが、あの中島岳志さんが尊敬する西部先生ですから、今度はちょっと気合を入れて読んでみよう。

2. 総論

はじめに種明かしを致します。

私は日本の核武装は不可能だと思っております。すべきか否か以前に、やろうとしても無理という意味で。

理由は簡単。**途中でバレるからです。**核爆弾をつくろうとすれば、IAEA に知られていない核燃料濃縮施設が必要でしょう。またそこで使う原料はどこから調達するのか？ モニターカメラもかいくぐらねばなりませんし、監視要員の目もごまかさねばなりません。（それとも某国の如く、IAEA 要員を追放しますか。あるいは小説『トリプル』の某国の如く他国から強奪しますか）

仮にバレても、既に完成しておれば、あるいはその後まもなく完成させてしまうのなら、逃げ切り勝ちと居直ることもできるでしょう。しかし露見したのが道半ばだったら最悪です。日本たたきが趣味の某国が熱狂するのは当然のこととして、「同盟国」も庇ってはいくれないでしょう。しかもおそらく計画は半ばで頓挫するのではないのでしょうか？

核武装論者の先生方は、「核を持つこと」の是非を、現実論と称して語ります。しかし「持つまでのプロセス」に目を向ける人がどれだけいるのか？ 「俺が持ったら」の議論は「俺が政権取ったら」、「社長になったら」の議論と同じです。それを私はマンガと呼んでいます。

結局この本も上記の「思い込み」を覆すには至りませんでした。（持つまでのプロセスに一切言及していないのですから「不戦敗」といってよい？）

しかし興味深い指摘もいくつかあるので次節で述べます。

同時に、ちょっとどうかな、と感ずる点もいくつかあります。それも触れることにします。

3. 私の読み取った指摘事項

博引旁証と申しましょうか、あまりにも多彩で華麗なレトリックゆえ、鈍才に理解できたのはごく一部分ではありますが、おおよそ次のような論旨であったと思います。

① 「核の傘」に依拠しながらの「非核三原則」

我々は本音では「某国に対してはアメリカの核があるから」と思っているのだからたしかに矛盾しています。

② 「核の傘」も実は破れ目がある

報復が怖いから先制攻撃を慎むというのが核抑止論です。しかしミサイル技術の進歩で報復に対する再報復が容易になった今、アメリカが守ってくれる（先制攻撃への報復をしてくれる）とは限らないと西部先生は言います。だから自分で核を持たねばならぬのだと。

これは「先手必敗ゲーム」に似ていますね。先に手を出せば負けのようですが、相手の油断について先に既成事実を作ってしまうと、今度は相手方が先手番になるので身動きが取れなくなるという。

かなり説得力のある理屈だと思います。これこそが西部理論の生命線といってもよいでしょう。

勿論 ICBM は冷戦時代から存在したので、これをもって最近の特別な傾向とは言えません。とはいえ、クリミア問題で先手を取られた西側が身動き取れずにいるさまを見ると、核による抑止効果が限定的なことに思い至ります。（自前の核を持っていれば、とりあえず一発ぐらいいはお見舞いできます。先方にそう思わせる効果もあります）

③ 米中接近の可能性

米中が談合して日本の利害を脇にやってしまう可能性を親米保守の論者は考えない。いいかえれば外交上の理由で核の傘が信頼できなくなる可能性もあるということです。

④ 要するに思考停止ではないか

あてにならない核の傘が機能していることにして、国防問題なканずく核問題から目をそむけるのは単なる思考停止だという主張もその通りだと思います。

⑤ 自己満足的な「唯一の被爆国」論

現存する通常兵器での戦災に無関心なくせに人道的なことを言ってもウソっぽいという指摘にも賛成せざるをえないと思います。

またこれは私個人の印象ですが、海外で「唯一の被爆国」論を唱えても、「だから何？」で終わることが多いようにも感じます。（勿論例外はあるとは思いますが）

⑥ 自立自尊の気概

他人の揮で相撲をとり、思考は停止したまま、長い物には巻かれろで流されるというテイタラク、と先生は指摘しています。（一種の道徳的頹廢ではないのかということでしょう）「パクスナントカーナ」という言葉にしても元々は「ナントカに平定された属国的状態」を指すのだそうで。

⑦ NPT 脱退したとして害ありや

非加盟の印・パ・イスラエルにアメリカは友好的ではないか。北朝鮮の脱退でも目立った制裁はないではないか、まして日本が北朝鮮より非侵略的な国であることは周知のこと、よって世界から非難を浴びるには至らず、と西部先生はいいます。

⑧ アメリカにも日本の核武装を是認する動き

「アメリカのニュー・リアリスト(新現実主義者)の研究者たちは、ほぼこぞって、『核』の拡散は国際秩序の安定化に寄与する、と主張しているではありませんか」(48頁)

初めて知りました。西部先生が勝手に気炎を上げているのかと思ったら、アメリカでも有力な議論だったのか、と態度を変えてしまうところが、我々の属国根性なのかもしれません。でも、読者には結構インパクトのある情報ですね。

このほかにも色々おっしゃっているのですが、鈍才としてはついていくのが困難なのでこれぐらいにしておきます。

4. 内容面での疑問

⑨ 「核兵器を持つまでのプロセス」の無視

2節と重なりますが、やはりこれは最初に書いておかねばなりません。

⑩ NPT脱退に実害はある

とりあえずアメリカがどう出るか考えてみましょう。

印パにしても核実験当時は経済上の締め付けがありました。それにアメリカの対インド政策が最近宥和的になったのは、既に核開発済(防止には手遅れ)であること、インドにおける開発済みの核はアメリカにとってさほどきなくさくないこと(中東とも直結しないし)を背景に、経済界のインド市場への進願望を実現させようということだと思います。

イスラエルの場合はどうでしょう? アメリカが制裁に及ばぬのは、勿論イスラエルびいきだからでもありまじょうが、既成事実化による逃げ切り勝ちの面が大きいと思います。(それでも全く無傷というわけではなく、ベングリオン大学など2組織が Entity List に掲載されています。)

では日本が核開発に着手しているのが判明した場合はどうでしょうか? アメリカとしては、黙認すれば近隣諸国との関係が緊張化するでしょうし、北朝鮮の核を否定できなくなる。玉突きでイランの核開発が進行することも連想されるところですから困るでしょう。幸か不幸かまだ進行形の開発ですから、やめさせるために相当の手段をとることは明らかです。わかりやすいところでは穀物やシェールガスの禁輸あたりでしょうか。

⑪ アメリカの核拡散推進論は論拠になるのか

主唱者のウォルツという人は大変な大物学者だそうです。だからヘンチキ論などではないでしょう。しかしこの理論がアメリカで主流になることはありえません。

というのはウォルツ先生、広い範囲の各国が核兵器を持つのがよいとおっしゃるのはともかく、イランにも持たせるのがよい(イスラエルだけが持っているのが中東不安定の原因)

とおっしゃっているからです。

その理論を敷衍すれば、日本だけでなく、北朝鮮も韓国も台湾も持っていいじゃないか、ということになるでしょう。それを受け入れる度量は、勿論私にはありませんし、恐らく殆どの日本人も同じでしょう。

西部先生は、アメリカの有力な言説であることのみを紹介し、我々の属国根性を刺戟していますが、こうしたマイナス面を伏せていませんか？

⑫ 外交とは相手との相互作用であることを無視していないか

核兵器を持つ資格は非侵略的国家であること、と西部先生は言います。だから日本は資格十分、米中露はちょっと疑問、英仏はOKだそうです。

我々から見ればたしかに日本は資格十分ですが、周囲から見てもそうだとは限りません。また先制不使用宣言すれば周囲を安心させることができるというものでもありません。(現に中国は宣言しています) 近隣との緊張が高まることは避けられないでしょう。

自分の論理にばかり気を取られ、自分の手元だけを見ていては、そういうことに気が付きません。仮に「味方に正しき道理あり」としても、相手を見ずに「敵は幾万ありとて」と突撃するわけにはいかないと思います。

5. 文章表現に関する疑問

⑬ 連発される横文字言葉

殆どのページに「トータル・ウォー (総力戦)」というような括弧付きの横文字言葉が登場します。

西部先生曰く「それらの議論における概念の整理はまず(アメリカをはじめとする)諸外国で行われ、それらが我が国に紹介されるという経緯を辿っているのですから、外国語の表記についてまず言及しておくのが文章表現の親切というものなのです」

しかしそれは学術書の場合でしょう。どうせ原書など読まぬ我々には、余計な親切というものです。却って「この先生実は外国文物輸入学者じゃないか」という印象が強く残りました。

第二の疑問は「それが正しい引用なのか」ということです。たとえば

国家における「核」の所在 (118 頁)

国家とは、繰り返して確認させていただきますが、ネーション (国民) とそのステート (政府) のこと、両者を結び合わせて国・府のこととあります。しかしかつて律令時代に地方政府を国府とよんでいたのですその表現を避けるとすると、「国民とその政府」を国・家とよぶのが適切であり、それすなわちネーション・ステートのことにほかなりません。だからそれを「国民国家」と訳して平然としている現代日本の政治学者および政論家の言語感覚は、「国家のうちにすでに国民が含まれている」、少なくともそれが国家という日本語の最も標準的な用いられ方であるということに気づかないという意味で、鈍感きわまりないのです。

はて「ネーション・ステート」でも「国民国家」でもかまいませんが、それは、民族と国家が一对一で対応している（少なくともそのような意識が広まっている）国を指すものと思っておりましたが。（だから中華人民共和国やロシア連邦は当てはまらない） なんだかあやしい感じがしてきましたね。

次の例は横文字ではなく漢字ですが

「核」にとってどんな民主制が必要なのか より（158頁）

「輿論とは、社会の輿（台）にいる者としての「庶民」が抱く「歴史的常識」のことです。それに対して世論とは（後略）

輿論とは「輿人（車造り、車ひき、衆人をいう）の論」と辞書（『字通』）にはあります。「輿」に特別な意味があるわけではないのです。（この辞書を信用するとしてですが） なんだか「師走＝先生も走るという忙しい月」レベルの「教養」を拝見しているような気がしてきました。

第三の疑問は、「そもそもそのような横文字を用いる必然性があるのか」です。

わざわざ「コールド・ウォー（冷戦）」という表現を用いる（167頁）意味があるのでしょうか？ 「冷戦の概念は輸入物だからまずカタカナ表記が必要だ」と本気で信じているのならもう勝手になさい。

⑭意味不明の節が多すぎる

国語の授業と思ってご覧ください。

「国家のジレンマ」にはまる「核」 より

ナショナリズムという言葉ならば、それを「国民主義」と理解することができるので、受容することもできるでしょう。つまり国民の歴史によってその国の国柄が醸成され来たるのだということに重大な関心を寄せるかぎり、ナショナリズムは健全なネーション（国民）の持つべき常識の最たるもの、と行ってさしつかえありません。（133頁）

しかし国家主義となるとそうはいきません。ネーション・ステートは国家ということですので、国家主義にはステータリズムが、つまり「政府主導の画一的かつ統制的な内政と外交」の方式が含まれることとなります。このステータリズムが、国内にたいしては、域際および人際の関係から多様性と可変性を奪い、国外にたいしては、国際の関係から柔軟性と有効性を剥いでしまいます。極端な場合、ステータリズムは国内においてはファシズム（一様な形で”束ねる”こと）を過剰に推し進め、国外へ向けてはショーヴィニズム（排外主義）を発揮することとなります。（134頁）

とはいえ、ナショナリズムに立つものとしての国家は、ホップズに倣っていると、「リヴァイアサン」（巨大な怪獣）です。防衛論とのかかわりでいうと、その怪獣がいてくれるおかげで、国民は互いの相克、葛藤、敵対を解決することができます。だから、国家は国民の「安全と生存」にとって不可欠の制度ということになります。しかし国家の「ジレンマ」（板挟み状態）のことが、とくに国家主義者の防衛論にあって、見逃しにされるのは要注意です。

国際政治学における有名な命題としての「国家のジレンマ」とは、一方で国家のおかげで国民の「安全と生存」が保証されるとしても、他方では、諸国家が（互いのステータイズムのゆえに）反目し合うとき、それぞれの国民の「安全と生存」がかえって危うくなる、ということです。このジレンマを国内外の「状況」のなかでいかに乗り越えていくか、それが防衛の本質だということになります。

このジレンマの回転で眼が回ったせいと考えられるのですが、現代人は、ナショナリズムにたいして、奇妙に愛蔵相半ばする態度をとりつづけてきました。つまり、後進国のナショナリズムについては、大国による帝国主義的な支配からの自由をめざす運動として礼賛します。他方、先進国のナショナリズムにかんしては、国家主義の（さらには帝国主義の）現れとして批難します。そういう二枚舌がナショナリズムをめぐるつかわれてきました。これは、要するに、現代の国際社会が「国家のジレンマ」を克服していないということにほかなりません(135頁)

私には先生が何を言っているのか全く分かりませんでした。

まずナショナリズムを上記のように定義するとは知りませんでした。私の知っているのは「偏狭で排外的なナショナリズム」が多かったものですから。ナショナリズムが「健全なネーションの持つべき常識の最たるもの」であることはむしろ珍しいかと思えます。

次にステータイズムのくだりはこういうことでしょうか。国家は対内的・対外的ともに硬直的なふるまいをしがちである。そこでしばしば、その国のナショナリズムは柔軟・賢明であるにもかかわらず、国家としては内外ともに極端に走り頑迷で武張った行動をとってしまう、と。

さてそこでジレンマ云々です。そもそもジレンマとは、両立が困難な二つの価値の間で生ずる板挟みを指しますから、ここでは「国民の安全と生存を増進する」「対外的に強硬な自己主張をする」という二つの価値の両立に苦しむという図式かと思えます。とすれば「ジレンマの克服」とは、国家がその二つの価値のバランスを上手にとるということでしょうか。

では「国際社会が国家のジレンマを克服できていないのと、現代の我々がナショナリズムについて二枚舌を使うこととの間に強い関係がある」とはどういうことでしょうか？ 関係など最初から存在しないのではありませんか？

「二枚舌」とは、たとえば満洲事変において、激昂する中国側感情に理解を示す一方で勝利にわく日本側の提灯行列に眉をひそめるのが矛盾している、どちらもナショナリズムなのに、ということでしょうか？ 別に矛盾でも二枚舌でもないように思いますがねえ。

それに「国家のジレンマ」を「国際社会が克服」できていれば、ナショナリズムに対して我々の態度が安定するはずだなんて、どこを叩けば出てくるのでしょうか？ そもそも「ジレンマの克服」が「国際社会の課題」とも思えませんし、様々なナショナリズムに対して我々の態度が一貫している必要もないと思えます。

以上、論理の支離滅裂ぶりを見てきましたが、同様に大きな問題は、こうした議論が本書の主題にどう関わっているのかがさっぱり見えないということです。まともな本であれば

多少難しい文章でも我慢して読んでいけば最後に意味がつながって爽快感が味わえるものです。本書の場合はそれがありません。

たとえば上記引用は、節のタイトル（「国家のジレンマ」にはまる「核」）にどうつながっているのか？ そして核がそのジレンマにはまっていたらどうなのか、本書の主題にどうつながっていくのか？ 鈍才の私には読み取ることができませんでした。

かくて劣等感まるだしで何ですが、博識ぶりをひけらかしている」とひがみっばいことを言いたくなってしまうのです。

⑮メッセージを伝えることに失敗した本

これ以上粗探しにおつきあいいただくのも心苦しいので、そろそろまとめに入ります。

著者の博識は十分堪能しました。しかし別のタイプの賢い人、たとえば池上彰さんならこんなにたくさん披露したでしょうか？ メッセージが読み手にあやまらず伝わるよう、エピソードを厳選し、諄々と説き聞かせてくれたはずです。

著者の主張・メッセージの評価は別にして、本書は失敗作であったと結論します。

(2014. 11. 24)